

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 季節の巡りを告げる花

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小池, 寿子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001627

季節の巡りを告げる花

小池寿子

フランス中世の『薔薇物語』(前編ギヨーム・ド・ロリス作1280頃〜後編ジャン・ド・マン作1370頃)は、薔薇の蕾(愛)の探求を綴ったアレグリー文学である。5月の光まばゆい朝、主人公は、夜が明けた夢を見て、いそいそと身纏いをして野辺に出かける。小鳥たちのさえずり心地よく、きらきらと水面に緑を映す小川のせせらぎに誘われて歩みを進めると、外壁に囲まれた庭園に行き当たると。園の名こそ「悦楽の園」。中にはナルキッソスの泉があり、主人公は泉に映った薔薇園に咲いているひとときかわいらしい蕾に恋をしてしまう。彼に愛の矢を射貫いた「愛の神」は、春に咲くエニシダや葦、蔓日々草や色とりどりの花々で飾られたロープを纏い、頭には薔薇の帽子を載せているが、夜鳴鶯(ロシニョール)が花びらをつついて落としてしまうという。こうして「愛の神」の臣下となった主人公は「愛」を求めて苦難の旅に出る。夢を梓とした梓物語であり、その文学形式もさることながら豊かな内容とあいまって、13世紀以降ルネサンスを経て、19世紀に至るまで人々を魅了し、美術を彩った。

前編は、薔薇に導くはずの「欲待」が、最終的に「嫉妬」の城に幽閉されて、主人公は嘆きに暮れる場面で終る。一転して続編は、「理性」が「愛」とは種の保存のために「自然」にしかけた詭計であるされ、老婆は愛の実態を赤裸々に語り、「自然」の告白と嘆きなどが綴られ、権力、貧困、世界の創造と自然認識とは何ぞや、と問う百科全書的内容をもつ。また反フェミニズム的として15世紀始めにはパリの女性文学者によって猛攻撃も受けた。因みに、幸いにも主人公は「愛の神」軍によって「嫉妬」の城が攻撃されて念願の薔薇を掴み、夢が覚めるといふ筋立てである。

この長編の詳細はさておき、二人の人物に注目したい。まず冒頭、悦楽の園の扉を開けてくれる「閑暇」。きれいに

着飾って主人公を園に導く彼女は、「友達からは閑暇と呼ばれてます、楽しんで、気晴らしをしたり、髪を梳かして編むこと以外は何もしていません、美しく優雅な「悦楽」に親しくしていただいています」と語る。閑暇は、悦楽の園でカロール（輪舞）を踊る「悦楽」「歓喜」「美」「礼節」「富」「鷹揚」「気高き」「若さ」「愛の神」の10人の美德の一人だ。暇！中世を学ぶ醍醐味は暇を愛することにある、との、中世文学専門の知人たちの言葉を今も思い出す。

さてこの庭園を囲む壁には、美德に対して10人の悪徳の擬人像が描かれている。「憎悪」「悪意」「下賤」「貪婪」「強欲」「羨望」「悲哀」「老い」「疑信心」「貧困」だ。ひとつひとつの申したい美德と悪徳だが、注目したい第二の人物「老い」の姿を眺めてみよう。往時よりすっかり背が縮まってしまい、かつては柔らかくすべすべした顔は萎びて皺だらけ、耳には毛が生え、齒は抜け落ちて、すっかり醜くなってしまった。彼女が死んだとしても、さほどの損失も惜しむこともないだろう。「時」というものは休まず過ぎてゆくのであって、死がそれを阻むまで、皆を老いさせる、云々。老いの描写に見るごとく、美德と悪徳のそれぞれの特質と運命が縷々語られる。戦乱絶えず、強欲な支配者に虐げられる人々が短い人生を駆け足で終えてゆく過酷な中世だが、それは、中世に限ったことではあるまい。

悲惨な「老い」には、しかしひとつ、息をのむような描写がある。髪はすっかり白くなってまるで花が咲いたようだと。前段で、光に満ちた百花繚乱、青春の悦楽の園の美德が描かれたのちに、白花にたとえられた白髪を読むと、老いに対する密かな哀惜の念さえ感じるのだ。ヨーロッパでは3月から6月に向かって、白い花、ついでミモザのような黄色い花、そして李山などのピンクの花へと次第に色合いを増して、緑豊かな五月を経て太陽の陽射しが強くなる6月には、さくらんぼの季節が夏を告げる。パリなど北の街では早春から花屋が街に彩りを与えて、老いも若きも足取り軽く、さんざめきが街路に溢れる美しい季節だ。白い花は、新たな季節の巡りの始まりを告げる小さな贈り物なのである。

『薔薇物語』は、篠田勝英訳（平凡社 一九九六年）参照

（西洋美術史）